みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Kamilaroi People : An Aboriginal Community in Moree, Northwest New South Wales

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 利夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004012

国立民族学博物館研究報告28(4): 477-513 (2003)

ガミラロイ
──地方町モリーにおけるアボリジナルの歴史と現在──

松山　利夫*

Kamilaroi People: An Aboriginal Community in Moree, Northwest New South Wales

Toshio Matsuyama

この報告においては，これまでほとんど情報のなかった「白人オーストラリア」Settled Australia における地方町のアボリジナル，ガミラロイの歴史と現在を，植民期における牧場（ステーション）との結びつき，モリーへの移住とフリンジ・キャンプの形成，当時から現在まで持続されている「クラス」に焦点をあてて記述する。

植民期，北西平原のガミラロイは，エディ Eddie 牧場の「台帳」Station Ledger Book によると，牧地の開墾や羊の毛刈りとそれにかかわる雑役，および植民地政府がおこなう「配給」Rations をつうじて，牧場とのつながりを深めていた。その後 1890 年頃になるとモリーには最初のフリンジ・キャンプがミーハイ川の川岸に形成され，20 世紀初頭にはガミラロイ領域の各地から移住した人びとによってさらに 4 つのキャンプがつくられる。それらは，スティール・ブリッジ・キャンプがクィーンズランド州境に近いボガビラ Boggabilla 出身者からなったように，おおむね移住前の居住地を反映していた。その彼らは，自らを 3 つの「クラス」に区分していたのであり，その指標とされたのが「オーストラリア」社会への同化の度合いであった。

1960 年代になるとこれらのキャンプは 2 つのアボリジナル・リザーブ，ミーハイ・ミッション Mehi Mission とスタンリー・ビレッジ Stanley Village に吸収される。しかし，彼らはなお「クラス」区分を維持した。その目安となったのがそれぞれの生活水準である。下層の「クラス」に属する人にとってそれは否定すべき対象であったが，上層にとってはヨーロッパ人社会へのアクセスを可能にする手段のひとつであった。

*国立民族学博物館先端民族学研究部

Key Words：Kamilaroi, Moree, class, fringe camp, Northwest Plains
キーワード：ガミラロイ，モリー，クラス，フリンジ・キャンプ，北西平原

そうした現在のガミラロイにとって，「自由」がもつ意味は「クラス」によってちがっている。上層にとってそれは社会福祉からの独立であり，下層の人びとにとっては貧困からの解放を意味する。「白人オーストラリア」に生きるガミラロイをとりまく社会的な条件は，なお貧しいといえよう。

In this paper I describe the Kamilaroi community who live in the small town of Moree on the Northwest Plains in New South Wales. I focus on their relations with pastoral stations during the process of colonisation, migration from secondary residences to fringe camps and the social class system in their community. Anthropologists have so far had little information about their historical and contemporary situation.

During the era of colonisation, the Kamilaroi of the Northwest Plains depended on pastoral stations by clearing fields, building work, and receiving government rations. Around 1890, the first camp was set up on the Mehi river bank opposite Moree District Hospital. By the early twentieth century another four camps had been established some distance from town by migrants from almost the entire Kamilaroi country. These camps were roughly divided according to the place of former residence: for instance, the Steel Bridge Campers were migrants from Boggabilla on the Queensland border. According to their descendants who live in the town, they formed three social classes or strata within their community depending on the degree of assimilation.

In the 1960s the camps were absorbed into two Aboriginal Reserves, Mehi Mission and Stanley Village, established by the government. Yet class or social strata remain based on family economic standards. For the lower class, this system means denial of status as Aboriginal people in Kamilaroi community. On the other hand, upper class people want to preserve their status as a means of accessing the white community through marriage and so on.

For the people of the two classes, “freedom” has different meanings. For the upper class, it means independence from welfare, for the lower class, independence from poverty. These meanings are unchanged from the fringe camp period. Their social conditions at a rural town in settled Australia are still poor.

1　はじめに
2　背景──地方町モリーとガミラロイの領域
2.1　地方町モリー
2.2　ガミラロイの領域
3　ガミラロイの被植民地化
3.1　植民地化の過程
3.2　最後のボーラ儀礼
3.3　牧場との結びつき
4　フリンジ・キャンプの形成とガミラロイの「クラス」
4.1　モリーへの移住とキャンプの形成
4.2　ガミラロイの「クラス」
4.3　ジョンとビルの暮らし
5　まとめ

1　はじめに

オーストラリアにおいて，先住民アボリジナルの社会と文化に関する組織的で科学的な研究が本格化するのは，1940 年代になってからである。その画期をなしたのが 1940 年と 1942 年のアデレード大学による大陸中央部の人類学調査であり，これを契機にアメリカ全国地理学協会とオーストラリア連邦政府が組織した 1948 年のアーネムランド学術調査であった。いずれも当時のオーストラリア大陸にあって，最も知られていない地域とされたところである。アデレード大学の調査は砂漠に暮らすアボリジナルの生活と儀礼に関する民族誌映画をもたらし，ハーバード大学と共同でおこなわれた後者の調査は一連の大部な報告書として公刊された（Mountford, C. P. ed. 1956, 1958, 1960, 1964）。また，この調査に際して収集されたアボリジナルの美術作品をはじめとする資料は，民族学の標本としてスミソニアンとオーストラリア各州の博物館に収蔵されたのである。この 2 つの学術調査は，キャサリンとロナルド・バーント夫妻をはじめとする気鋭の人類学者によるフィールドワークを，オーストラリア各地に展開させることになった。

こうして先住民アボリジナルに関する人類学者の主要な関心は，いわゆる辺境 Remote Australia に注がれることになり，20 世紀末までのアボリジナル研究は辺境をめぐって展開したのである。それはアボリジナルの宗教や世界観の理解，また近年では土地権の回復と先住民権原（ネイティブ・タイトル）の確認に大きく貢献したが，その一方で増加しつづける都市居住アボリジナルを捨象することになった。そのことは 1980 年代はじめの「アボリジナリティ」をめぐる議論に典型的に示される。たと

えばクームスらは，次の 7 つの要素を合わせもつ者がアボリジナルであるとした。

1. オーストラリア先住民の子孫　2. 非アボリジナルとの間における歴史的・文化的経験の共有　3. ドリーミングないしアボリジナル的世界観の共有　4. 土地および自然界への愛着　5. 親族関係にもとづく相互扶助義務を基礎にする社会関係　6. 葬送儀礼とそれへの参加の重視　7. 一言語以上を話し理解する（Coombs, et al. 1984: 61）。

これらはいわゆる辺境の社会を前提にしており，都市に居住するアボリジナルにはその多くが適合しなかった。彼らが都市居住者となったのは，親もとから強制的にひきはなされて政府が運営する施設に収容されたためであり，ヨーロッパ人家庭に里子にだされたためであった。あるいはリザーブやミッション[1)] の人口増加にともなう運営費の負担増から，一般社会への吸収策のもとで都市に移されたからである。彼らの都市移住は，固有な言語と文化からの断絶を強いられた結果であった。

ヨーロッパ人の人口が卓越する大陸南東部の「白人オーストラリア」Settled Australia のなかで，いわゆる都市アボリジナル Urban Aboriginal の研究が展開するのは，1970 年代末から 80 年代以降である。都市に居住する彼らの人口がアボリジナル総人口の 8 割近くに達し，とりわけ州都では州のアボリジナル人口の 4 割以上が集住するようになったこの時代，博士課程に在籍する若手研究者を中心に，州都（メトロポリタン）におけるアボリジナル・コミュニティの研究がおこなわれる（早い例には Bell, J. H. 1959 や Barwick, D. 1963 がある）。彼らが明らかにした都市居住アボリジナルの特性，すなわち親族間や出身地を同じくする者の間での強固な結びつき，モディファイされた彼らの宗教への信仰，アボリジナル表象の表現法と公権力への抵抗などは（たとえば Schwab, R. G. 1991），80 年代から 90 年代におけるアボリジナリティ論を現実に即した内容の豊かなものにしていった（Keefe, K. 1988; Beckett, J. 1988; Hoolinsworth, D. 1992）。

こうした動向のなかにあって，「白人オーストラリア」に位置する地方町のアボリジナル・コミュニティは，言語状況に関する報告を別にすると，「アボリジニ保護委員会」Aborigines Protection Board が機能していた 20 世紀初頭における社会関係や，同制度が廃止された（ニューサウスウェールズ州での廃止は 1938 年）後の 1940 年代末に若干の報告があるにとどまる。なによりも強調されるのは，同化政策廃止後の 1970 年代以降におけるインテンシブな調査報告がみられないことである。それはおそらく，彼らのコミュニティが人類学的な関心をよばなかったからであろう。「白人オーストラリア」の地方町はアボリジナル人口が少なく，メトロポリタンでおこった諸現象が時間をおいてくりかえされているとみられただけでなく，農牧業とそれに

関連する諸産業が発達したまさに安定した Settled 社会とみられたからだと思われる。それとともに，現地のヨーロッパ人社会がアボリジナルの存在そのものを隠蔽しつづけてきた，つまり，社会的に先鋭化された問題が認められなかったからでもあっただろう。しかし，それらは彼らが不可視の状況におかれてきたことを意味する。そのため近年になって一部の人類学者の間では，そうしたアボリジナルに関する研究の重要性が指摘されてきている。だが，彼らにとって調査をはばむ大きな問題は，植民の実践者とその子孫とみられることによる，つまり人類学者も連邦や州政府諸機関の調査者と同じであるとするアボリジナルの抵抗である。国勢調査に応じない人びとが他地域に比べて相対的に多いことは，こうした地方町のひとつの特徴ともなっているのである。

これらの事情によって，「白人オーストラリア」における地方町のアボリジナル・コミュニティは，研究のはざまにおかれてきた。本稿ではそうした地方町のひとつとして，ニューサウスウェールズ州の北西平原に位置するモリー Moree をとりあげる。この町に居住するアボリジナルはガミラロイ Kamilaroi が中心であり，彼らは植民地史がもたらしたアボリジナルの呼称を嫌って周辺の集団とともにマリー Murri を自称している[2)]。その彼らの歴史と現在を，被植民地化の過程とそこにおける牧場とのかかわり，モリーへの移住と街区周縁における居住地（フリンジ・キャンプ）の形成，同化政策期と現在のそれぞれにおけるアボリジナル内部の「クラス」を指標に記述・分析する。それは今なお不可視のままにおかれるアボリジナル・コミュニティについての情報を提供することであり，研究のはざまをいくらかでも埋めるためである。

2　背景──地方町モリーとガミラロイの領域

2.1　地方町モリー

モリーは，ニューサウスウェールズ州北西平原の東部に位置する（図 1）。モリー平原行政区 Moree Plains Shire の中心であるこの町の 1996 年センサス人口は 9,250 人，ガミラロイが大半を占めるアボリジナル人口は 1,822 人である（Australian Bureau of Statistics 1997）。しかし，センサスは必ずしも実勢を反映しない。調査員は各戸を戸別に訪問するが，ガミラロイの多くは調査を拒否するからである。したがって，彼らの実人口は今なお推定の域をでず，行政区役所 Shire Council ではその人口を 3,000 人強とみつもっている。他方，主としてガミラロイを対象にした「コミュニティの開発

と雇用促進事業」（Community Development Employment Program）事務局，およびこの町の「アボリジナル土地委員会」（Aboriginal Land Council）はともに約 4,000 人と推定している。ここではこれらの推定値を勘案し，町の総人口約 1 万人，その 3 割強をアボリジナルが占めるとみなすことにする。

いずれにしても彼らの失業率は高く（行政区役所の公式数字は 65%，別の推計では 90% 強），ほとんどのアボリジナルにとっては季節労働の賃金と失業保険金が主

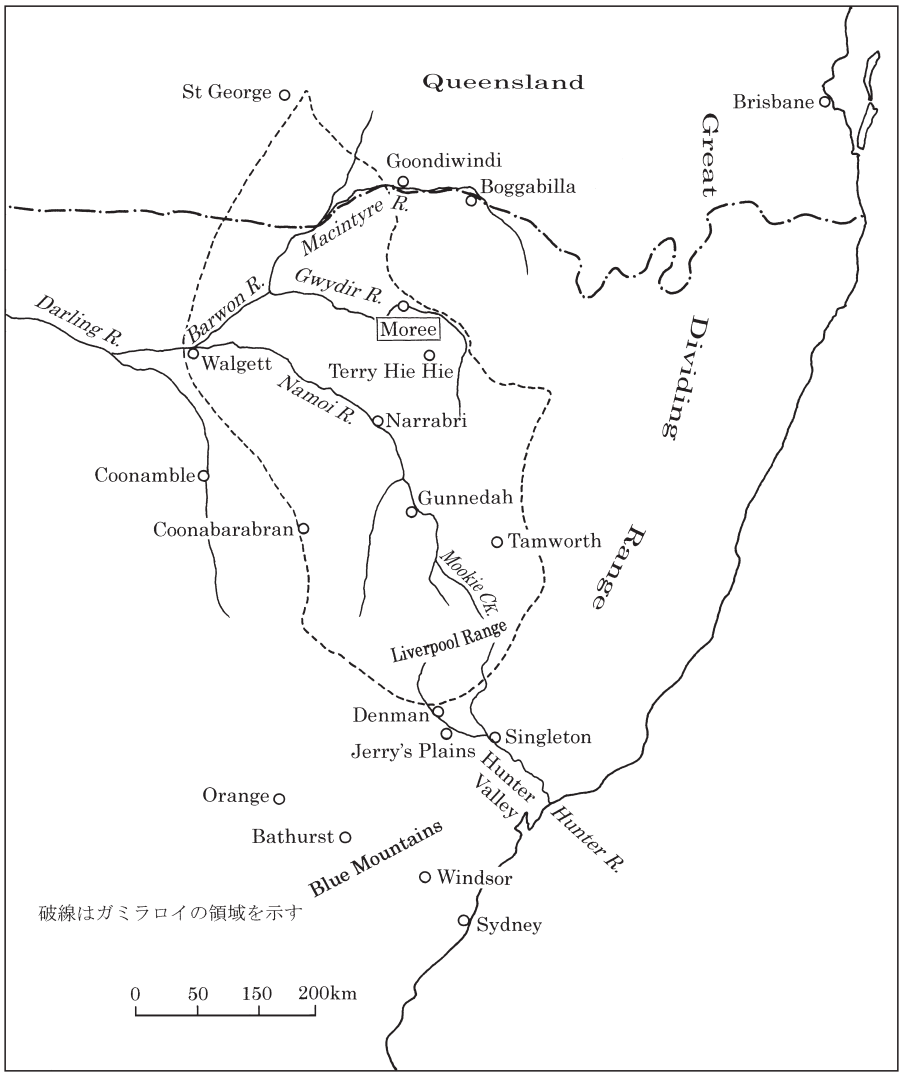


図 1　モリーとガミラロイの領域

要な収入源である。そうした3,000人をこえる彼らは，推定人口約1万人が居住するモリーの街区からはなれた2つのアボリジナルランド，ミーハイ・ミッション Mehi Mission（1947年リザーブに指定[3]）とスタンリー・ビレッジ Stanley Village（1967年リザーブに指定）を中心に，イースト・モリーのジェームス通り James Street 西端の街区（推定人口約600人）とソーピイ・ロウ Soapy Rowe，それにイースト・モリーを中心とするヨーロッパ人との混住区にわかれて生活する（図2）。これら5つの居住区は，後に詳しく述べるように，モリーにおけるガミラロイの移住と生活の歴史に深くかかわっている。そのほとんどの住宅は賃貸住宅であり[4]，ソーピイ・ロウの居住者を除いて持ち家はきわめて少ない（図3）。失業という経済的な事情もさりながら，ここが自らの土地であるにもかかわらず，それを「購入しなければならない現実」に多くのガミラロイの人びとは強い抵抗を抱いているからである。

一方，ソーピイ・ロウの居住者（推定人口100人程度）は多くが州や行政区，

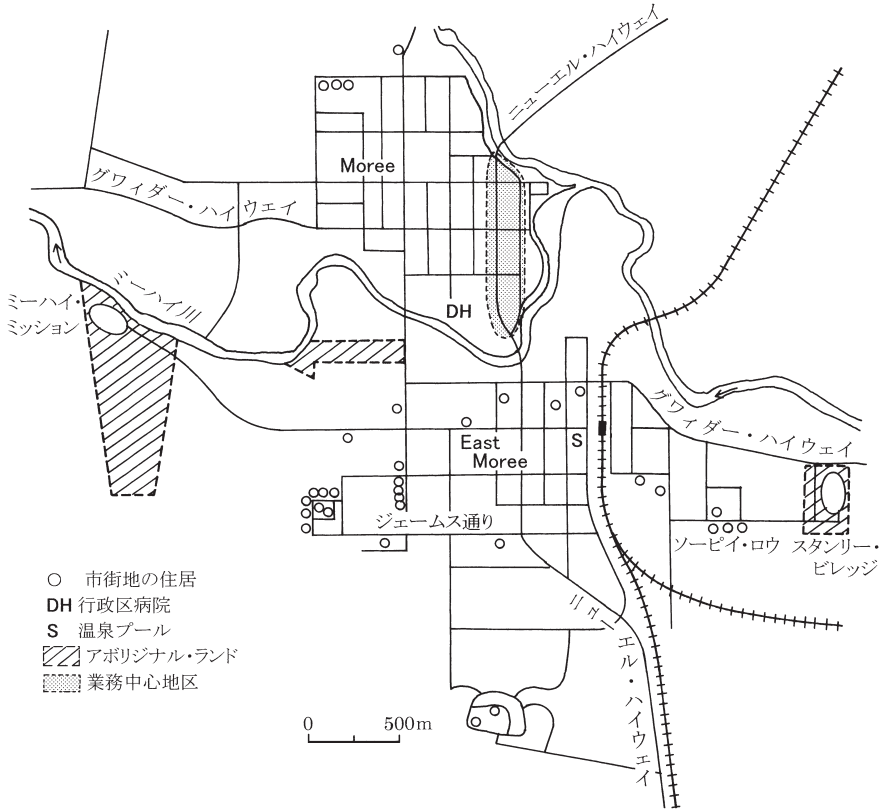
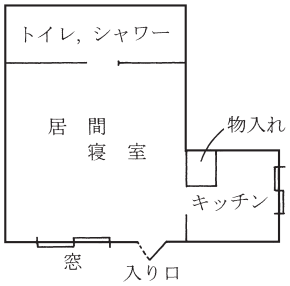
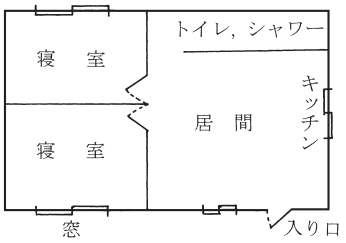


図2　ガミラロイの居住地（街区居住者の分布は筆者の調査による）



例 1. ブロック造り(居住家族 1 人)
州政府が障害者用に建築した住宅



例 2. 木造(居住家族 5 人)
民間の賃貸住宅

(いずれも訪問調査にもとづいて作成)

図 3　街区に居住するガミラロイの賃貸住宅

ATSIC（アボリジナルおよびトレス海峡諸島民委員会）の出先機関などに勤務する定職者であり，かつてこの地にあった石けん工場労働者用住宅を工場廃止とともに購入した持ち家の居住者である。しかし，いずれの地区に生活するにせよ，彼らのなかに本来の言語ガミラロイ語を保持する者は少ない，筆者が確認できた言語保持者は，モリーの北約 120 km，クィーンズランド州境に近いボガビラ Boggabilla 近郊に住む年長の女性と，モリーの町で言語復興にとりくむ数人の女性たちにすぎなかった。

行政区役所によると現在この町のアボリジナル政策は和解 Reconciliation を基本とし，それを達成するためのガミラロイの歴史認識の共有と，彼らのコミュニティとその文化への精神的・経済的な支援，および雇用と住宅改善の実現をめざしている（Shire Council General Manager へのインタビューによる）。ほとんどの人びとが職を持てない状況のなかで，雇用機会の創設は大きな関心事でもあり，当局は彼らの歴史に結びついたカルチュラル・エコツーリズムの開発に期待をよせている。しかし，外部の者が抱くこの町のイメージははかばかしくない。穀物サイロしか高い建物がない静かで穏やかな町モリーは，一方で人種差別の激しい町とみられている。ホートンによると（Horton, D. 1994）この町に住むヨーロッパ人[5] は次のように語ったという。「ここにはアボはいないね。奴らを全部駆逐したからさ」。一方，ブリスベンやシドニーの少なくとも一部の人は，「モリーはタフなアボリジナルの町」とみている。前者はアボリジナルの存在を隠蔽し，後者はアボリジナルの抵抗を強調する。この矛盾する外部者のイメージのなかで，町に住むガミラロイ自身はヨーロッパ人を好意的な人とそうでない人びとに区分する。町での食事や飲酒の際，彼らはこれを基準にいきさき

を決定している。これらのことは，サービス業に従事するガミラロイ女性が，この町には今のところ 2 人しかいないことの理由でもある。そうした状況は季節労働の契約先にも反映される。

機械化された大規模な小麦と綿花栽培を基幹産業とする現在のモリーにあって（これら第 1 次産品の輸出は年額 2 億ドルをこえる），非熟練労働者の雇用機会は綿花農場における除草作業しかない。これは綿花の成長促進と収穫期におけるハーベスター（綿花収穫機）の効率的な運転を目的に，ほぼ半年の間くりかえしおこなわれる。クワを用い数人を 1 チームとする作業は早朝から正午までの 7 時間が原則で，1 人 1 日当たりの賃金は 75 〜 90 ドルである。モリーに住むガミラロイの大半は特定農場との直接契約にもとづいて，9 月末からの約 6 ヵ月間，断続的にこの季節労働に従事する（飛行機による除草剤の大量散布もおこなわれるが，それでも収穫前の除草は不可欠だという）。

この季節労働を除くと，定職をもたない彼らには，行政区役所が運営する温泉プールに関わる契約労働のほかに，雇用機会はない。この温泉プールは，1895 年灌漑用水の確保を目的に掘削した掘り抜き井戸（深さ 850 メートル）から温泉が湧出したものの活用で，今日では非アボリジナルを含めた低所得者層の憩いの場となっている。しかしそこは，モリーに居住するガミラロイ人口が増加しはじめた 1930 年代末からフリーダム・ライド運動が告発する 1965 年までの間，彼らの利用を排除してきたのであった。

シドニー大学のアボリジナル学生チャールズ・パーキンスを中心に組織されたフリーダム・ライドは，ニューサウスウェールズ州北西部の地方町を順に訪問し，それぞれの町におけるアボリジナル差別を告発する運動であった。モリーに到着した彼らは温泉プールからのアボリジナルの排除に抗議してピケを張り，ついに町当局にその使用を承認させた（チャールズ・パーキンス 1987, 124–133）。そうした経緯をもつ温泉プールはこの町のガミラロイにとってひとつのシンボル的な存在であるとともに，冬季には南部諸都市から多くの入浴客を集め，ハイウエー通過客へのサービスを含めて年間 300 万ドルの観光収入をもたらしている。

2.2　ガミラロイの領域

ガミラロイは，こうした特徴をもつ地方町モリーに集住する。しかし，彼らの本来の領域は北西平原東部の 75,000 平方 km に達し（Tindale, N. B. 1974: 194），その広さはタスマニアに匹敵する（日本に例を求めれば，それは北海道にほぼ等しい）。大分

水嶺山脈の西斜面から流下し，ダーリング川 Darling River に注ぐ諸河川がうるおす黒色土の平原には（図 1 参照），ヨーロッパ人の入植以前 1 万 2,000 人から 1 万 5,000 人あるいはそれ以上の人々が生活した（Millis, R. 1994: 69）。ティンデールはその領域の南端をリバプール山脈 Riverpool Range に求めたが（Tindale, N. B. 1974 Maps），ミリスとオッルークはリバプール山脈南斜面のハンター谷 Hunter Valley 上流，今のデンマン Denman あたりから北をガミラロイの領域として認めている（Millis, R. 1994: 69, O'Rourke, M. J. 1997: 38）。ここではこれらの見解を踏襲して，南部についてはハンター谷上流部を領域に含めることにする。

こうした広範な地域に生活したガミラロイは多くの方言集団に分かれていたのであり，今日ではそれらを統合してガミラロイ・ネーション Kamilaroi Nation を名のっている。そのイニシアルが K であるのは，国際アルファベット音声表記にもとづいて，軟口蓋破裂音にこの文字を採用したティンデールにしたがっている（Tindale, N. B. 1974: 1–2）。クィーンズランド州ケアンズ Cairns 郊外に居住するジャブガイにおいては，それをチャプカイ Tyapukai と表記するか，ジャブガイ Djabugay の表記を採用するかによってアイデンティティの内実が異なることが知られているが（Finlayson, J. 1995），ガミラロイに関しては目下のところそうした問題は生じていない。ただし，彼らが Gamilaroi の表記をとることもまれにみられる。たとえば，アメリカでのスー Suex との合同美術展覧会を開催した際のカタログには，Kamilaroi を基本にしつつもこの表記法を採用している（Hall, M. D. 2000: 16, 78）。おそらく観覧者への配慮からであろう。

3　ガミラロイの被植民地化

3.1　植民地化の過程

ハンター谷　ガミラロイの被植民地化は，ハンター谷上流域から開始された。1788 年シドニー・コーブ Sydney Cove に拠点を築いたヨーロッパ人は，6 年後の 1794 年にはシドニー西方のウィンザー Windsor にいたり，1820 年当初にはハンター谷中央部のジェリーズ・プレインズ Jerry's Plains にいたったのである。ハンター谷へのこうした急速な展開は，ブルー・マウンテンズ Blue Mountains を西へこえたバサースト Bathurst 地域（1816 年入植）に比べて，この谷が牧畜に適した肥沃な土壌にめぐまれていたからであった。その結果，長さ 100 km 幅 50 km のハンター谷は，1820

年代中頃までには早くも過放牧の状態になったのであり（Millis, R. 1994: 46–51, 72–73, Webb, R. J. 1972: 18），生活に困窮したこの地域のガミラロイは，ほどなくしてシドニー市内の交通の要衝サーキュラー・キー Circular Quay へと流出する。当時のシドニーは，人口 10 万を擁する都市に成長していた。

こうした状況は，入植者にあらたな土地を求めさせることになった。この頃ロンドンに本社をおいていたオーストラリア農業会社 Australian Agricultural Company は，ニューサウスウェールズ植民地の希望する場所に，40 万 4,000 ヘクタールにのぼる広大な土地のリース権（借地・用益権）を取得していた。その農場用地の探査とハンター谷の過放牧とは，植民地の拡大をはばんでいたリバプール山脈越えのルートを開設させたのである。こうして 1824 年から 25 年にかけて，山脈をこえたリバプール平原への入植がはじまった。これはガミラロイにとって，本格的な被植民地化の開始を意味した。

リバプール平原（ナモイ川流域）　リバプール山脈をこえたヨーロッパ人は，1827 年にはナモイ川 Namoi River の支流モーキィ・クリーク Mookie Creek にいたり，31 年にはタムワース Tamworth とガネダ Gunnedah に到達する。一方，バサーストから北上した入植者は 1826 年にはガミラロイ領域南西端のカーナバラブラン Coonabarabran にいたる（Millis, R. 1994: 74–75, 78）。ガミラロイは南部を挟撃されるようにして植民地化されていった。

ここからナモイ川以北への入植は，1831 年から 32 年にかけてのトマス・リビングストン・ミッチェル Thomas Livingstone Mitchell の調査以後に，再び急速に展開する。1831 年ハンター谷のシングルトン Singleton を出発したミッチェルは，ガミラロイ領域の主要部をなすナモイ川，テリー・ハイ・ハイ・クリーク Terry Hie Hie Creek，グワィダー（ビッグ）川 Gwydir（Big）River からバーウォン川 Barwon River 流域を調査し，ガミラロイ領域中央部への植民の道をひらいたのである（Millis, R.: 83–87）。こうしてガミラロイの主要部には，1836 年にリバプール牧畜行政区 Liverpool Pastral District が設置された。この行政区はシドニーとその周辺 19 郡 County の外側に設けられた 7 つの牧畜行政区のひとつで，ミッチェルが踏査した諸河川の流域を含んでいた（ただし北限は設定されなかった）。当時，この行政区にはすでに 80 のパストラル・ステーション（大規模牧場）が開設され，12 万 1,000 頭の羊と 6 万 9,000 頭の牧牛，それに牧童が使用するための馬 404 頭が飼育されていたのであり，ヨーロッパ人の入植者は 626 人を数えた（Millis, R.: 158）。

これらの大規模牧場は，生活用水と家畜の飲料水を確保する必要から，いずれも

主要な河川沿いに設けられた（図 4）。ガミラロイ主要部への植民は，諸河川の流域沿いに展開していったのである。それゆえにヨーロッパ人入植者と彼らとの衝突は避けがたいものとなった。ガミラロイもまた河川沿いに生活したからである。こうして 1838 年 1 月，ウォタールー・クリーク Waterloo Creek にキャンプしていたガミラロイのローカルな集団約 70 人が虐殺されることになり，その半年後，入植者によってここに大規模牧場が開設されたのであった（Millis, R.: 183–190, 197）。

大量殺人はヨーロッパ人による土地収奪への抵抗をめぐってもおこなわれた。同じ

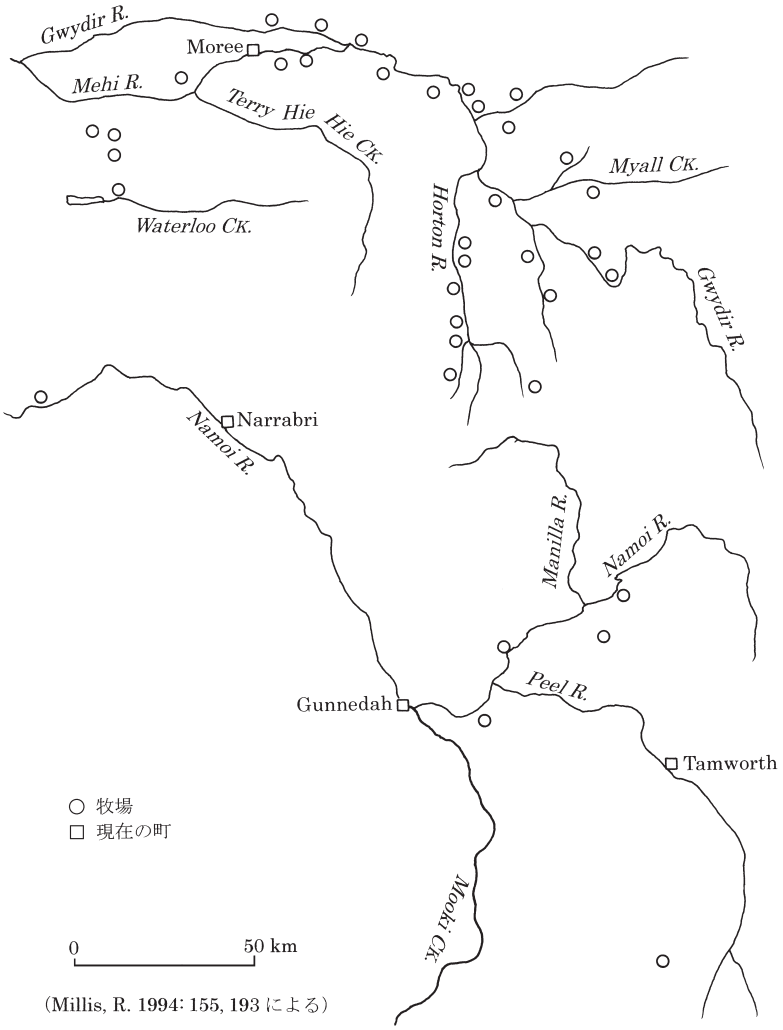


図 4　ガミラロイの領域における牧場の分布：1838 年

年の 6 月，モリーの南東約 100 km のマイオール・クリーク Myall Creek におけるウエラエライ Weraerai（ガミラロイ領域の北東に接する集団）の殺戮は，ヨーロッパ人の住居や家畜に対する襲撃への牧童による報復であった[6]。悲惨をきわめたこの事件から 129 年後の 1965 年，統一教会 Uniting Church を中心に非アボリジナルを含む人びとは，ウエラエライ 18 人の死を悼み「記念碑」設立委員会を発足させ，2000 年 6 月にそれを建立している（Myall Creek Memorial Committee 2001: 15, 20）。アボリジナルの哀悼の色である白い花崗岩の小石で囲まれたその碑は，ガミラロイにとってもきわめて重要な意味をもつ，歴史的な記念碑となっている。

グワィダー（ビッグ）川流域とモリー　ミッチェルの踏査から 6 年を経て 2 つの虐殺事件がおこった 1838 年，モリーに近いグワィダー川（かつてはビッグ川とよばれた）流域には，すでにいくつかの牧場が開設されていた。しかし，ヨーロッパ人にとってなお辺境であった当時，この地域の入植者は牧童を中心に 120 人ほどにすぎなかった（Webb, R. J. 1972: 28）。それでも大規模牧場の開設は狩猟採集民ガミラロイに大きな影響をもたらし，その人口は 700 人ほどを数えるまでに減少したのである（Millis, R. 1994: 587–589）。さらに，この地域がグワィダー牧畜行政区 Gwydir Pastral District となった 1848 年には，牧場用地の借地権の保持者 Grazing Lease Holders が 100 人を数えるにいたった。その後この行政区のヨーロッパ人人口と飼養家畜数は急速に増加し，モリーの町が建設された 1861 年，行政区の人口は 2,114 人，牧牛は 22 万 8,000 頭，羊は 35 万 6,000 頭にのぼったのである（Webb, R. J. 1972: 28）。

それから 30 年の間にこの町では地方新聞 Gwydir Examiner が創刊（1881 年）され，行政区病院 District Hospital（1889 年）と銀行が開設されて[7]，モリーは地方中心町としての性格を備えていった（写真 1）。そして町のヨーロッパ人人口が 1,100 人をこえた 1890 年頃（Moree Plains Shire Council 1989: 3–4），この町に初めて永続的なガミラロイのフリンジ・キャンプが出現する。ピット・ファミリー Pitt Family とよばれたのがその人たちであった。この人びとは，ガミラロイ女性エイミー・アイヴィ Amy Ivy とヨーロッパ人ダニエルズ Daniels の系譜につながるいくつかの親族集団のひとつである。もともとモリーとその周辺に暮らしていた彼らは，ミドル・キャンプの最初の居住者となったのであり，その子孫のなかには後にスタンリー・ビレッジやソーピイ・ロウに生活する者も現れたのである。

こうして領域を収奪されたガミラロイの人びとは，ヨーロッパ人侵入以前の最大で 1 万 5,000 人強から，20 世紀初頭には 800 人にまで減少した（このうち非混血人口は 133 人にすぎない。Millis, R. 1994: 730）。大規模牧場の開設によって資源が枯渇した



写真 1　モリーに残る町建設当初の木造家屋

彼らにとって，狩猟採集を維持するだけの空間は残されていず，遅くとも 19 世紀末にはガミラロイのほぼすべては，植民地政府が組織した「アボリジニ保護委員会」がおこなう配給 Rations に依存せざるを得ない状況になっていたのである。インフルエンザや天然痘も無視できない人口減少の要因であった[8)]。そうしたなかでガミラロイの宗教生活もまた，壊滅的な打撃をうけたのである。

3.2　最後のボーラ儀礼

かつてガミラロイの宗教を特徴づけたのは，創世の精霊あるいは神バイアミ Baiami とダラムラン Dharramulan への信仰であり，これらをともなうボーラ Bora とよばれた成人儀礼であった。バイアミは，鳥と動物しかいなかったこの世の始まりの時，2 人の妻とともに空から（別のバージョンでは遠くはなれた北東の地から，またははるかな西の土地から）ガミラロイの土地に降りたった巨人である。彼は鳥と動物から，そして石と粘土からガミラロイの祖先となる男女を創造した。ついでバイアミはそれらの人びとに法をあたえ，最初の男性に成人儀礼をほどこし，グワィダー川を造りだすと空にもどった超自然的な存在であり，雷鳴は彼の声だとされている（O’Rourke, M. J. 1997: 173–174）。一方のダラムランは悪魔的な性格をもつとされ，ガミラロイの人びととバイアミの間をつなぐ媒介者であるとも，バイアミの妻であるともいわれる。これら 2 つの神格が，かつてボーラ儀礼の主要な構成要素をなした。

しかし，ヨーロッパ人の侵入とキリスト教化の影響とは，これらにもうひとつ別の説明をあたえることになった。かつてフィソンが 1880 年に記述した婚姻規則や半族の概念（Fison, L. 1991）が意味をもたなくなっていた 1940 年代，彼らはバイアミを God と表現し，キリストは後の時代におけるバイアミの再生であり，同一の神格がガミラロイとヨーロッパ人の間に現れたものとして説明していた。つまりバイアミは，ヨーロッパ人の間にも出現してキリストになったというのである。悪魔的であるとされたダラムランもまた，ヨーロッパ人の侵略が始まるとともに，天然痘をもたらすものとしての性格が付与されていった（O'Rourke, M. J. 1997: 177–178）。

そうした状況のなかで，この 2 つの像を主要な要素とするボーラ儀礼は，知られている限り 1905 年まで断続的におこなわれていた。そのいくつかを観察し記録したのがマシュウス Mathews, R. H. である。ニューサウスウェールズ植民地の測量官であった彼は，大陸東部諸地域の測量調査をおこなうかたわら，1894 年からの 6 年間にガミラロイを中心とする東部諸地域のアボリジナルについて 30 篇ほどの報告をまとめている。ここではそのうちのガミラロイの儀礼を記録した 2 篇によって（Mathews, R. H. 1894, 1896），ボーラ儀礼の概要を記述する。それはこの儀礼が当時すでに植民地支配の影響のもとにおかれていたことを示すためであり，「白人オーストラリア」にとりこまれたガミラロイにおいても，他のアボリジナル諸集団と同様，固有の美術伝統が存在したことを明らかにしておきたいからである。

儀礼の規模　アボリジナル諸集団において成人儀礼の一部に割礼をともなうのは，大陸南部のマレー川河口から北部のカーペンタリア湾を結ぶ線より西の集団である（Tindale, N. B. 1974 Maps）。これより東に位置するガミラロイと周辺の諸集団は，男性の成人儀礼においても頭髪と恥毛をそりとるにとどまる。そうした軽微な身体変工をともなうボーラ儀礼は，1894 年のガンダブロゥイ Gundabloui の例が夏に開催され，翌 95 年のタルウッド Talwood 牧場の場合は春の予定が秋のはじめにずれこんでいることから，冬を除く適当な時期に随時おこなわれたとみられる。マシュウスが記録したこの 2 つの儀礼への参加者は，対象となる若者とその家族を含めてそれぞれ 203 人と 150 人であり，若者のなかには数人の混血を含んでいた。それは，ガミラロイが他のアボリジナル諸集団とちがって母系社会であったため，生物学的な父が非アボリジナルの場合でもその系譜が確認でき，比較的容易に彼らをもとの集団に吸収し得たからだと考えられる。

儀礼の開催を告げるのは主催集団のリーダーが派遣する複数のメッセンジャーで，彼らは参加が期待される人びとのもとに送られた。19 世紀末のこの 2 つの儀礼に参

加した集団の範囲はかなりのひろがりをみせているが（図 5），それがボーラ儀礼に共通する特徴であったかどうかは定かでない。1895 年の儀礼開催地がタルウッド牧場であったように，当時のこの地域もすでにヨーロッパ人との交渉を深めていたからである。さらにこのことに関しては，図に明らかなように，参加集団の居住地が領域北部に限られている点が注意される。ヨーロッパ人の人口が相対的に多かったナモイ川流域を中心とする領域中央から南部のリバプール平原では，この頃すでにボーラ儀礼がおこなわれなくなっていた可能性が高い（これについてマシュウスはとくに触れていない）。

儀礼の場と彫像　しかし儀礼の場は，なお念入りに造成されていた。期待される集団の到着を待つ間，儀礼の場にはまず開口部をむきあわせた 2 つの円が 250 m ほどはなれた場所につくられる。ひとつは直径約 23 m のブーラ Boora とよぶ大円であり，

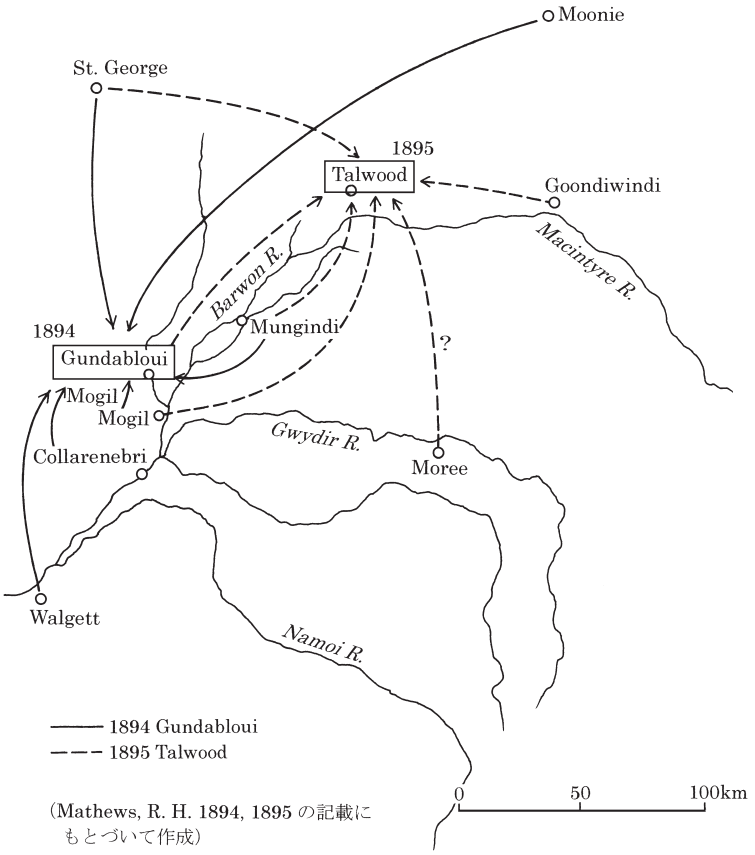


図 5　Bora 儀礼への参加者：1894, 1895 年

そこから小径に導かれたさきに小円（直径 14 m ほど）のグーナバ Goonaba がおかれる。さらにヤムニャムン Yammunyamun と総称される大地に刻まれたさまざまな彫像が，この小径に沿って順に配置される。それらの彫像にあってブーラから 86 m あたりに最初に現れるのが，地面を人形（ひとがた）に刻んで古着を着せた白人であり，横向きの像に頭骨をおいた雄牛である。これら 2 つの像が神聖で重要な成人儀礼に登場するのは，ヨーロッパ人の侵入というあらたに生起した事件をガミラロイの世界にとりこむことによって，彼らに固有の秩序体系のなかでそれを理解しようとしたことを表すのかもしれない。モーフィによると（Morphy, H. 1999: 223, 327–328），ヨーロッパ人との遭遇当初からアボリジナルは自らの社会と文化が持つ価値を彼らに理解させようと努めたのであり，従来なかったあらたな状況を自らの世界観に取りこむことで了解してきたからである。さきに触れたバイアミの神格やダラムランの性格にみられる変化は，そうしたことを例証するものである。しかし，今日モリーに暮らす人びとは，これらを「侵略者の象徴」より以上に説明することはない。

白人と雄牛につづいて現れるのが，創世の神バイアミとその妻の像である（図 6）。30 cm ほど土を盛り上げてつくられるこの 2 つの像のうち，バイアミの妻には乳房とパイプ・クレイ（白粘土）を固めたヴァギナが造形される。かたわらには「バイアミの火」Goomee がおかれ，儀礼の執行中は終日火が焚きつづけられたという。つづいてエミュ，大ヘビをはじめとする 3 種類のヘビが描かれ，毛皮に砂を詰めたポーキュパインの像が配置される。これらの図像をかこむ周囲の立木にはヘビや大トカゲ，ムカデが彫刻され（図 7）樹皮を剥いで落雷が表される。マシュウスの記録によると

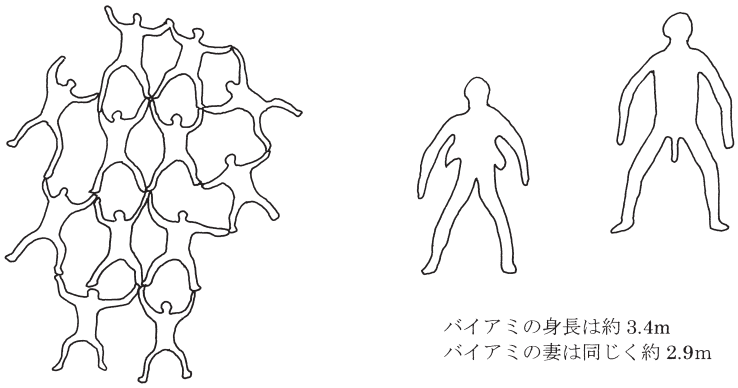
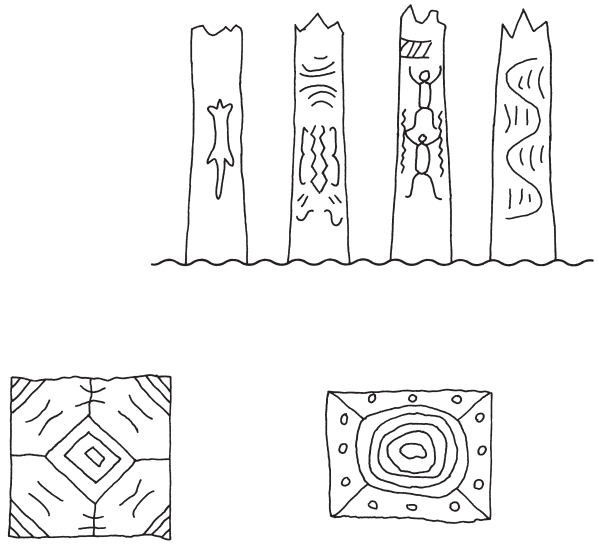


図 6　バイアミとバイアミの妻（右），手をつなぐ 12 人の人形（ひとがた）



立木の彫刻は左から大トカゲ，ムカデ，人物，大ヘビ．
（Mathews, R. H. 1894 による）

図 7　立木の彫刻と地面に刻まれた抽象文様

（Mathews, R. H. 1897），これらはガミラロイの半族トーテムであることが明らかである。

こうした造形には他にも太陽や月，樹皮を人形に切りとったバイアミの 2 人の息子をはじめ，図 6 に示した 12 人の人形が小円に頭をむけて手をつなぐ像，および図 7 の抽象的な文様が知られている。これらの神聖な像やデザインはボーラ儀礼の場に描かれただけでなく，人びとの帰属や記念すべき出来事あるいは死者の埋葬地の印として，多くの立木や岩の表面にも残された（写真 2, 3）。今となってはこれらの像やデザイン，とりわけ抽象文様の意味は明らかにしようがないが，ガミラロイもまた他のアボリジナル諸集団と同様，固有な美術伝統を保持していたのである。

儀礼の概要と植民地支配　こうして儀礼の場が整えられ参加を期待した集団がそろうと，儀礼がはじまる。対象となる若者はレッド・オーカーで彩色された後，年長者に先導されてまず大円ブーラに入る。ついで数日にわたって「バイアミの火」の周囲でダンスがつづけられる。ダンスが終わると若者はパイプ・クレイで全身を装飾され，小径をたどって小円グーナバに導かれる。その道筋で小径の両側につぎつぎと現れる大地の彫像と立木の彫刻の意味が，年長者によって若者に教えられる。小円にいたった年長者と若者はやがて儀礼の場をはなれ，そこから 10 km ほどのところに別



写真 2　テリー・ハイ・ハイ・クリークの岩の表面に残された抽象文様の線刻。左側の抽象文様は図 7（左）の一部に類似する。



写真 3　モリーの東約 160 km のコラレネブライ Collarenebri に保存されている立木に施された人物像。

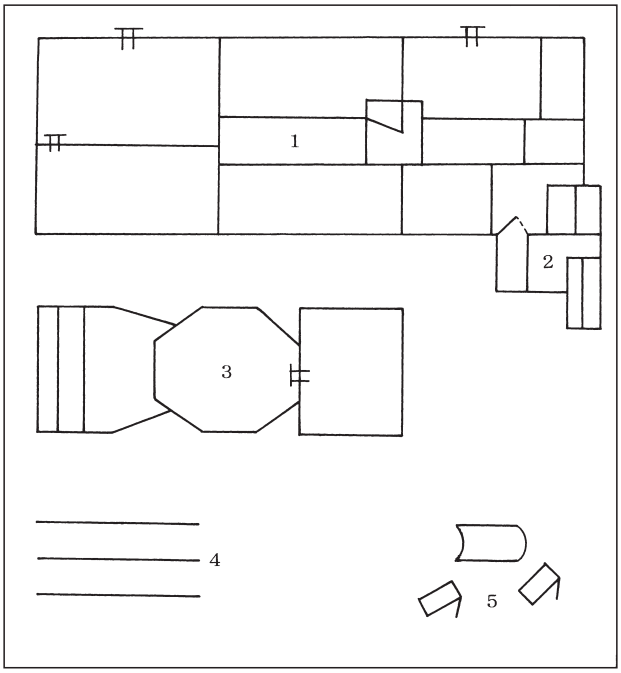
べつにキャンプする。この時点で 2 つの円と大地の彫刻はすべて破壊される。藪を馬蹄形に拓いた若者キャンプで 10 日を過ごす間に，彼らには神話をはじめとする文化，宗教，モラルについての教育がおこなわれ，軽度の身体変工がほどこされて，ボーラ儀礼は終了する。

マシュウスが記録したこうした内容をもつボーラ儀礼は，ヨーロッパ人の植民地支配のもとにあって，消滅直前の状態に追い込まれていたものであった。大地の彫像に「白人」と「雄牛」が取りこまれていることを別にしても，領域南部のリバプール平原に暮らしていたはずの集団が参加しなかったとみられるからである。そのうえさらに，これらの儀礼は，ガンダブロゥイを含めてともに大規模牧場の一隅で開催されていた。ガミラロイの宗教生活の核心をなしたボーラ儀礼でさえも，19 世紀末には牧場と無縁ではあり得なかったのであり，終末期の儀礼はヨーロッパ人とのかかわりのなかでかろうじて執行されたのである。

3.3　牧場との結びつき

1848 年にグワィダー牧畜行政区となったモリー周辺には，すでに述べたように，いくつかの牧場が開設されていた。これらの牧場には牧地のほかに，牧牛や羊の管理をはじめ，自家消費用の乳牛飼育場，牧童が使用するための馬の飼育と調教の広場など，細かく分割された施設が設けられていた（図 8）。これら牧童などの住居を含む施設を，牧地と区別してここでは牧場施設とよぶことにする。土地を選定した入植者が最初におこなったのは，この牧場施設の建設であった。彼らは割り当て囚人や仮出獄者からなる牧童と家事・雑役夫 2 ～ 3 人を送りこんで住居を建設させ，牧牛と馬の係留場，乳牛飼育小屋を設けさせて牧地を拓いていった（Millis, R. 1994: 158, 329）。これらが完成すると，ガミラロイをはじめこの地域のアボリジナルは牧童や雑役夫として，あるいはさらなる牧地開墾の労働力として雇用されたのである。図 8 のアボリジナル・キャンプは，そうした人びとの居住地であった。ただし，彼らはここに定住したわけではなく，いくつかの牧場施設をなかば定期的に巡回していたらしい。マイオール・クリークで虐殺されたウエラエライもそうした人びとであった。

こうした牧場施設とガミラロイの結びつきは，1886 年にテリー・ハイ・ハイ・クリークに入植し，現在にいたるまで牧畜業を営むエディ Eddie 牧場の「台帳」Station Ledger Book に記録されていた。牧場主の好意によって借用できた「台帳」は，牧場が形を整えたとみられる入植 3 年後の 1889 年から記載がはじまる。それには牧場が雇用した労働者ごとに仕事の内容とその期間，賃金が日をおって貸方欄に記入され，



1. 牧牛のための施設
2. 乳牛とその仔牛の飼養場
3. 馬の繋留と調教用グラウンド
4. 一時的な馬の繋留場所
5. アボリジナル・キャンプ（クィーンズランド博物館の展示模型による）

図 8　牧場施設の模式図：1886 年

同時に支払った賃金や牧場が設けた「倉庫」Store から彼らが購入した品物と数量，価格その他が借り方に記入されている。このほかヨーロッパ野ウサギ除けフェンスの設置など牧場の維持管理に要した費用や，牧場が売却ないし購入した家畜とその数量，およびそれらの家畜移送チームの経費などが「台帳」には記載されている。しかしいずれの仕事によるにせよ，雇用した労働者がアボリジナルであったかヨーロッパ人であったかの区別はない。仕事内容が同じ場合，雇用された者の間における賃金には差が認められず，これによって両者を区別することは困難である。そのためここでは現在のエディ牧場主が記憶するテリー・ハイ・ハイ地域のガミラロイの氏名と，モリーに生活するガミラロイの人びとによってテリー・ハイ・ハイ出身であることが確認できた氏名とから，「台帳」に記載されたガミラロイ労働者を特定した。この方法によって明らかにできたのは 7 名にすぎず，その雇用期間も断続的である。こうした制限はあるものの，この「台帳」からはガミラロイと牧場とのかかわりのいくつかを

具体的に示すことができる。

まずはじめに，牧場開設 3 年目 1889 年に雇用された RBR をとりあげよう（表 1）。彼は 10 月からの 2 ヵ月と 12 月の 1 週間，1 日当り 10 シリングの賃金で樹木の伐採と搬出に従事した。その 10 月 1 日の項に差引残高 14 ポンド余が記載されていることから，RBR はこれ以前にも同様の仕事に就いていたとみられる。当時この牧場では継続して牧地を開墾していたのである。牧地の開墾に必要な樹木の伐採には，小径木を斧などで直接伐り倒すほかに，リング・バーキング Ring Barking という方法が採用されていた。これは大径木に用いるもので，一定の高さで樹皮をリング状に剥ぎ取り，立ち枯れさせた後に伐採する方法である。少なくともテリー・ハイ・ハイ地域の開墾にはこれが一般的であった。

この労働によって RBR が得た賃金は 44 ポンド余で，彼はそのほとんどをチェッ

表 1　労働と賃金，その使途：RBR 1889 年

Credit			Debit	
10.1. Balance	14£. 3s. 3d.	10.31.	Debit a/c	10£. 8s. 3d.
31. 4 weeks+		11.7.	Cheque	1. 0. 0
3 days. 10/s	13. 10. 0	.25.	〃	2. 0. 0
11.1–30		.30.	〃	5. 0. 0
4 weeks +		.30.	〃	1. 5. 5
2 days. 10/s	13. 0. 0	12.2.	〃	2. 0. 0
12.1–6　1 week 10/s	3. 0. 0		PDY	1. 0
Log falling 192bl 1/2	8. 0		7 days off	3. 10. 0
Log drowing 760	15. 2		BLL	5. 7
	44. 15. 5		MITS	3. 16. 7
			3 Youtls	1. 4. 0
			55 bls Flours	11. 3
			Sugar	2. 4
				31. 4. 0
			Cheque	13. 18. 0
			Cash	5. 7
				44. 7. 7（45. 7. 7?）

Eddie 牧場 Station Ledger Book による。
PDY, BLL, MITS は人名，Youtls は意味不明。
金額欄の £ はポンドを，s はシリングを，d はペンスを表す。

クで受けとっている。記載された3人の氏名はガミラロイであると思われる。これは彼らの社会にレシプロシティがなお機能していたことをうかがわせるもので，RBRの親族関係にある人物が彼の名前で牧場主から現金を受けとったことを示すのであろう。一方，彼が購入した食品は小麦粉と砂糖あわせて13シリングで，それは労賃の1割にも満たない。この例による限り，牧場に働いた当時のガミラロイの小麦粉への依存は，思いのほか小さかった。それは10年後に雇用されたCTMにも共通する。羊の毛刈りをおこなうための一連の補助作業シェドワークShedwork（現在はRouseaboutという）に日当5シリングで6日，毛刈りに同じく24シリングで3日働いた彼が牧場主と「倉庫」から購入した食料品は，牛肉と羊2頭（あわせて20シリング）が中心で，紅茶を含めた小麦粉と砂糖の13シリング余をうわまわっていた。ただし，この牛肉と羊の購入目的はよくわからない。上述したガンダブロゥイでのボーラ儀礼に際しては牧場主が牛肉を提供していたが（Mathews, R. H. 1894），1898年およびその前後には，テリー・ハイ・ハイではこの儀礼は開催されていなかった（O’Rourke, M. J. 1997: 210）。彼はそれを親族とともに供したと思われる。

いずれにしてもこの状況が大きく変化するのは，20世紀に入ってからである。たとえば1920年6月におけるLVYの場合（表2），1ヵ月の購入品は小麦粉や砂糖，紅茶だけでなく，タバコやマッチ，石けん，銃に用いたとみられる火薬など10品目に多様化している。そのなかにあって購入金額に占める割合が最も高いのは小麦粉で42.4%を占め，8ないし10日間に1回，平均1 kgずつ買い入れている。この小麦粉はジョニーケーキとよぶ無発酵パンや粥にして供されていた。これについで金額が多いのはタバコ（15.8%），火薬（13.9%），砂糖（10.9%）である。大規模牧場に労働の場を求めていたガミラロイは，この頃その生活様式を大きく変容させていたのである。

この当時のエディ牧場は，「台帳」によるとウールを生産するための牧羊が中心で，7カ所の牧地に約1万頭を飼育していた。しかし，ヨーロッパ野ウサギによる牧地の被害は深刻で，1907年には608ポンドを超える大金を投じて，ウサギ除けのフェンスを建設している。1859年にビクトリア植民地南部のジーロングGeelong近郊に導入されたこのウサギは，生育北限に近いこの地で繁殖をつづけていた。それは貧しい人びとに食肉を提供したが，牧場主にとっては牧地を荒廃させるやっかいな動物だったのである。

この「台帳」にはまた，数年にわたって「アボリジニズ・ミール・アカウント」や「アボリジニ保護委員会」の見出しがあり，それぞれに金額を記入している。その最

表 2　ガミラロイ労働者の購入品：LVY 1920 年 6 月

4 Sugar	1s.	4d	25 Flour	4s.	0d
25 Flour	4.	0	1lb. Tea	1.	6
1B. Powder	1.	4	6 Sugar	2.	0
Cash	2.	0	25 Flour	4.	0
1B. Powder	1.	4	1B. Powder	1.	4
1/2 Log	2.	6	1 Soap		8
Cash	5.	0	1B. Powder	1.	4
1/2 Tea, 2 Sugar	1.	5	1/2 Log	2.	6
1/2 Log	2.	6	2 Jam	2.	0
1 Matches		5	1 Matches		5
4 Sugar	1.	4	1 Soap		10
2 Jam	1.	0	1/4 Bluh		4
1 Pain Hiller	1.	6	1B. Powder	1.	4
				2. 7.	9

Eddie 牧場 Station Ledger Book による。
購入品目は日付け順。最大は小麦粉で 75 lbs．12 シリング，ついで砂糖 5 シリング余。Powder は銃に用いた火薬を，Log は刻みタバコを示す。Bluh は意味不明。

初は 1905 年で，3 月から 12 月まで 3 ヵ月おきに 4 回の記載があり，年額は 39 ポンド余になっている。この年には金額にかかわる内容が記入されていないが，1916 年から 19 年と 20 年には小麦粉の記載がある（表 3）。これらのことから，この 2 つの見出しで記載されたのは，州政府が植民地政府から引き継いだアボリジナルを対象とする配給 Rations であることが明らかである。当時エディ牧場は「アボリジニ保護委員会」の配給拠点（Rations Deposit とよばれた）の機能を果たしていた。テリー・ハイ・ハイ地域に住んだガミラロイはこの配給に大きく依存していたとみられ，彼らは労働とは別のかたちでも牧場施設との強い結びつきをもっていたのである。とりわけ 1916 年から 1919 年にかけては少なくとも 200 人が配給の対象であったと推定され，その金額は年額 100 ポンドを超えていた。しかし，1920 年には対象人口は前年の 3 分 1 以下に減少し，再び 1905 年の水準にもどっている。1910 年代末における配給への一時的な依存率の増加は，この地域のガミラロイのために「アボリジニ保護委員会」が設けたテリー・ハイ・ハイ・アボリジナル・ステーションの人口が 100 人近くとピークに達し，ここを出る人びとが増加したことによるものと考えられる。一方，

表 3　Eddie 牧場が代行した配給

実施時期		対象となった人数	Rations 金額					
年	月		1 回当たり平均			年　額		
1905	3	24 〜 28 〈16 〜 17〉	9£	17s	9d	39£	10s	11¼d
16	6	(30+)	14.	1.	5	56.	5.	10
17	9	(158–198)	25.	17.	11	103.	11.	8
19			25.	8.	9	101.	15.	0
20	12	(20+)	8.	19.	1	35.	16.	6

Eddie 牧場 Station Ledger Book による。
〈　〉は子供の人数。(　) は年額を小麦の量に換算して推定した人数。
1906 〜 15 年の間は他の牧場がこれにあたったものと思われる。18 年の欠落は不明。

1920 年の減少は，彼らの多くが地方中心町モリーへ移住したことによってもたらされた。モリー平原に購読者をもっていた地方紙 Northwest Champion は「行政区月例委員会」をとりあげ，テリー・ハイ・ハイからモリーに移住した多数のガミラロイに対する対策が議題に上ったことを報じている（Northwest Champion, 1924. 3. 13)。彼らはピット・ファミリーにつづいて，モリーのフリンジに永続的なキャンプを形成していったのであった。

4　フリンジ・キャンプの形成とガミラロイの「クラス」

4.1　モリーへの移住とキャンプの形成

1890 年頃もともとモリーとその周辺に暮らしたピット・ファミリーが今の行政区病院 Moree District Hospital の対岸，ミーハイ川 Mehi River の川岸に生活しはじめると，間をおかずにエイミー・アイヴィ Amy Ivy につながる 5 つの家族がここに集住する。それからまもなく，このフリンジ・キャンプを出た人や，あらたにモリーへ移住してきたガミラロイによって，この町にはあいついで 4 つの居住地が形成された。それはイースト・モリーの街区を 1.5 km 西にはずれたボトム・キャンプ Bottom Camp であり，ここと街区とのなかほどにあったごみ捨て場につくられたコモン・キャンプ Common Camp である。さらにイースト・モリーの街区を東へ約 2 km はなれたミーハイ川にはトップ・キャンプ Top Camp が，鉄道橋の下にはスティール・ブリッジ・

キャンプ Steel Bridge Camp がつくられた。こうしてあらたに 4 つのガミラロイ居住区が出現すると，ピット・ファミリーの居住地は，ミドル・キャンプ Middle Camp とよばれるようになる（図 9）。

このなかにあって，街区に最も近かったミドル・キャンプは，ヨーロッパ人の非難の的となる。ヨーロッパ人にとって街区 Town は，彼らへのサービス提供と居住のための施設であり，町の周縁とはいえそこにアボリジナルが存在することを許せなかったのである。こうして早くも 1898 年には，行政区役所と病院の要請をうけた「アボリジニ保護委員会」がその排除を検討する。「保護委員会」はモリー東北 13 km のカローア・クリーク Carore Creek に 1 平方 km ほどのアボリジナル・リザーブ（集住地）を設けようとしたが，ここが配給拠点から遠すぎたために実現しなかった（Gwydir Examiner 1898. 12. 10）。このミドル・キャンプに居住した 5 家族は，モリーにおけるガミラロイ居住者の中核的な存在であった。彼らの一部はボトム・キャンプの核となり，ソーピイ・ロウや街区におけるヨーロッパ人との混住に道を開いていったのである。その一方でこれらの居住地は，「後来の人びと」Late Comers とよばれたリバプール山脈以北のガミラロイを吸収していった。その結果これらのフリンジ・キャンプは，おおむね出身地別に住み分けられることになったのである（表 4）。トップ・

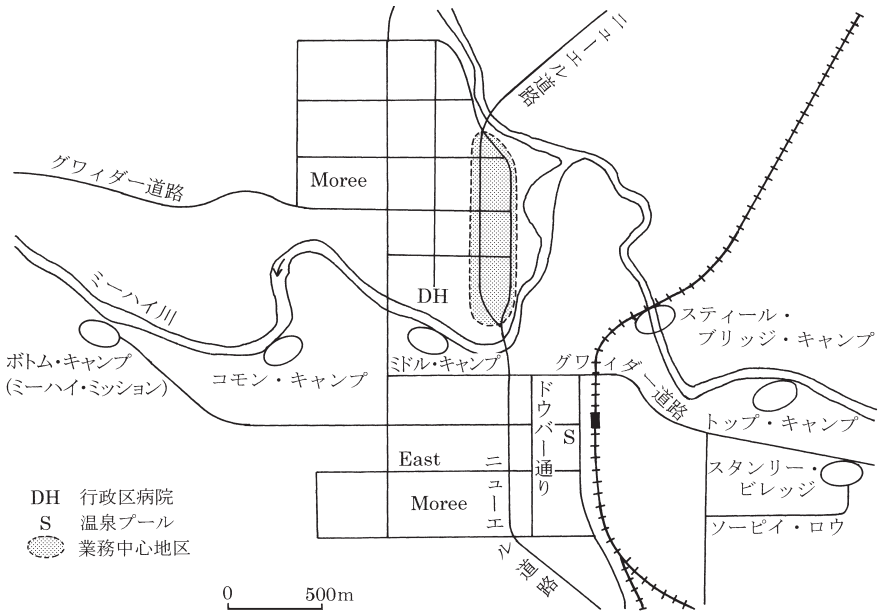


図 9　フリンジ・キャンプ：1950 年代中頃

表 4　キャンプ居住家族の出身地（聞きとり調査による）

ミドル	Moree
ボトム	Moree, St George, Pallamallawa, Terry Hie Hie, Tingha, Tamworth, Coonabarabran, Walgett, East Coast Region, 不明 5
コモン	Moree, Pallamallawa, Terry Hie Hie, Tamworth, 不明 7
トップ	Stanthorpe, Boggabilla, Terry Hie Hie, Caroona, 不明 5
スティール・ブリッジ	Boggabilla, 不明 4
スタンリー・ビレッジ	Moree, Pilliga, Coonamble, East Coast Region, 不明 8

キャンプには主としてテリー・ハイ・ハイとボガビラからの移住者が，スティール・ブリッジにはボガビラ出身者が生活した。ミドル・キャンプには依然としてモリーとその周辺の人びとが居住し，ボトムは各地からの移住者を包摂していったのである（図 10）。

こうした一種の住み分けは，移住前のそれぞれの土地における彼らの経験を反映していた。それを最もよく示したのが，トップ・キャンプでのテリー・ハイ・ハイとボガビラ出身者との間に生じた緊張である。領域北部のボガビラに対して比較的はやく牧場が開設されていたテリー・ハイ・ハイでは，すでにみたようにそれへの依存を強めていただけでなく，ここには 1895 年に「保護委員会」が監督官を派遣して運営したアボリジナル・ステーションが設けられており（1924 年閉鎖），1912 年にはアボリジナル・インランド・ミッション Aboriginal Inland Mission の布教拠点がおかれていた。これに対してボガビラには，20 世紀初頭からリザーブとよぶガミラロイの集住地があったにすぎない。つまり両者の間には，あらたな状況への適応度にかなりの差異があり，それがトップ・キャンプでの生活に緊張をもたらす原因となったのである。トップ・キャンプに居住したボガビラ出身者は，一部を残して，スティール・ブリッジに住むことになった。他方，成立当初からさまざまな地域の出身者を包摂してきたボトム・キャンプでは，その多様性のゆえにこうした緊張を生じなかった。モリーに親族をもたない新来者は（彼らはこれをストレンジャーとよんだ），1940 年代においても，まずボトム・キャンプを訪ねたのである（Reay, M. and Sitlington, G. 1948）。このような一種の住み分け，ないし出身地や出身集団のちがいによる差異化は，モリーにのみ特徴的なものではなかった。エルキンによると[9]，モリーの西ガミラロイ領域の西端に位置する当時のウォルゲット Walgett においても，これが認められたのである（Elkin, A. P. 1947）。

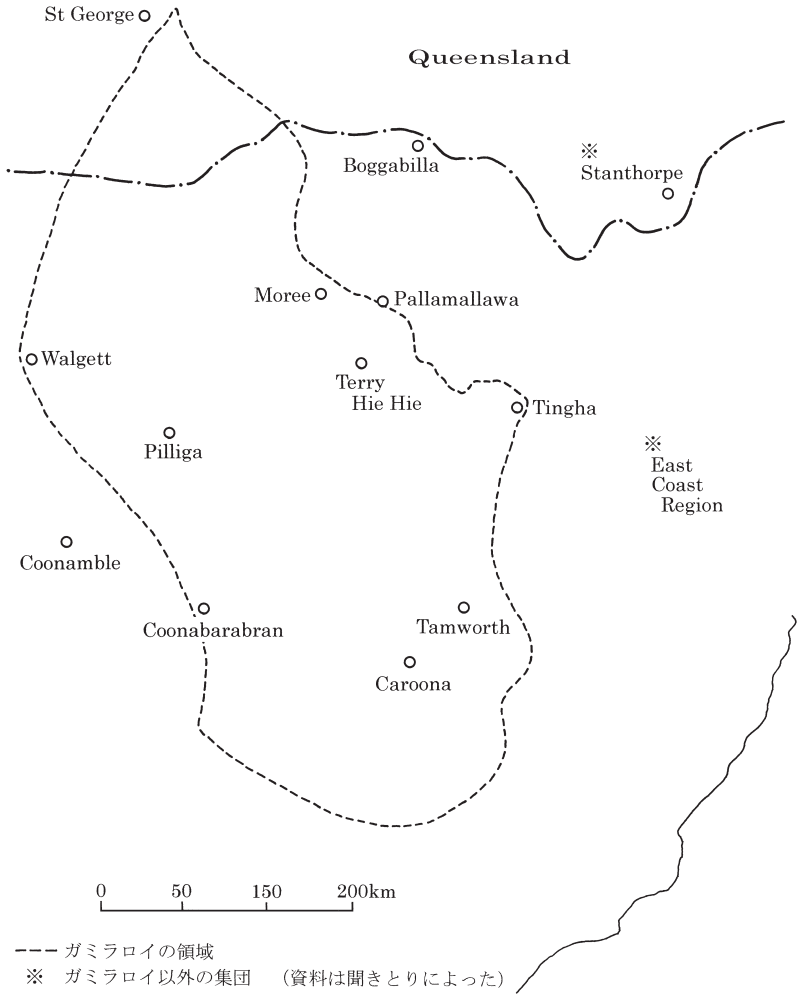


図 10　モリー移住者の出身地

モリーへの彼らの移住は，主として 1902 年にこの地域を襲った干ばつと 1910 年の大洪水，それに第 1 次大戦による不況と北西平原における地方中心町としてのモリーの成長にもとづいていた。ガミラロイはほとんどがモリーへと集まり，州都シドニーを除くと，そこはニューサウスウェールズ州で最も多くのアボリジナルが集住する町となったのである。彼らが形成したそれぞれのキャンプの居住者は，無論，すべてがそこにとどまりつづけたわけではない。相対的に孤立していたスティール・ブリッジ・キャンプを除くと，彼らとその子孫のなかには，おもに婚姻関係を介して，前の世代とは異なるキャンプを選択する者もいたのである（図 11）。その彼らがキャンプ

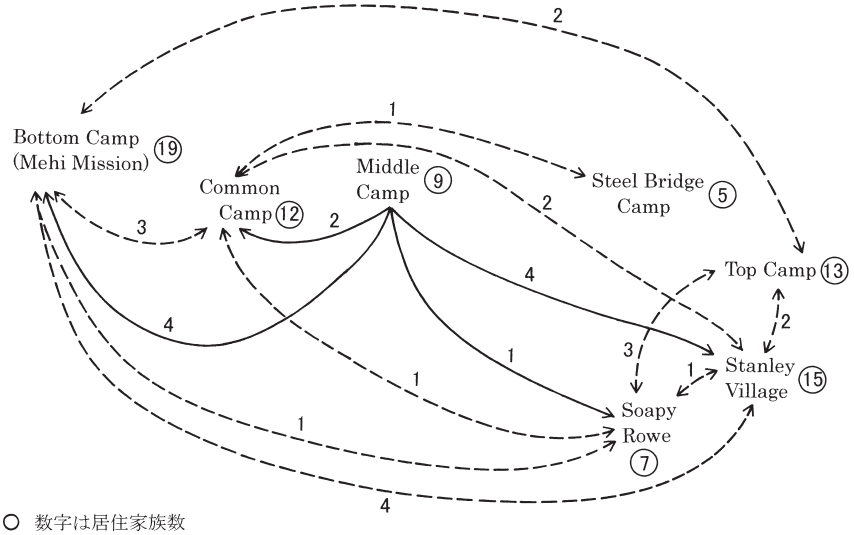


図 11　居住家族間の親族関係：1950 年代中頃

を出てヨーロッパ人と混住しはじめるのは，意外に早くまずイースト・モリー に現れる。警察裁判所 Police Court の判決を報じた 1898 年の地方紙 Gwydir Examiner によると，イースト・モリーのドウバー通り Dover Street には WLK というアボリジナル女性が暮らしていた（Gwydir Examiner 1898. 2. 28）。彼女がガミラロイであったかどうかは不明だが，おそらくこれがヨーロッパ人との混住の最初の例である。しかし，そうした混住が本格化するのは 1940 年代中頃のことと思われる。この頃モリーの街区には 34 人の居住者が知られているからである（Sitlington, G. 1948）。その後この人口は増加をたどったとみられるが，今この町に居住するガミラロイは，1965 年のフリーダム・ライド当時でさえ，ヨーロッパ人との混住にはアボリジナリティの放棄が条件であったと伝えている。

町に住むヨーロッパ人は，これらのフリンジ・キャンプを不潔で不衛生であり，争いや犯罪の温床とみていた。1950 年代から 1960 年代においても，比較的豊かな暮らしをしているとされたトップ・キャンプでさえ，彼らの住居は波板トタンの切れ端やたたきのばした灯油缶が主要な建材であった（Briggs-Smith, N. 1999: 38–39）。ごみ捨て場につくられたコモン・キャンプでは，廃車に暮らす者もみられたのである。そのため行政区役所と「アボリジニ保護委員会」は，1898 年にミドル・キャンプの排除を検討して以来，くり返しこれらフリンジ・キャンプの撤去を試みてきた。しかし，

居住者の抵抗のために成果を上げることができず，1923 年には彼らの排除に代えて，街区から 5 ないし 8 km はなれることを条件に住宅を建設し，アボリジナル（ヨーロッパ人にとってガミラロイはアボリジナルでしかなかった）を収容することになった（Moree Gwydir Examiner. 1923. 5. 17）。こうして 1930 年ボトム・キャンプの地にミーハイ・ミッションが設けられ，トップ・キャンプ近くにはスタンリー・ビレッジが建設された。しかし，当初の住宅建設戸数は数戸に満たなかっただけでなく，強制的な排除に対するこの時期のガミラロイの執拗で強力な抵抗によって（Goodall, H. 1996: 173–177），これらのフリンジ・キャンプはひきつづき存続することになる。その結果彼らの居住地は，ミーハイ・ミッションに吸収されたボトムキャンプを含めて，6 カ所になった。

4.2　ガミラロイの「クラス」

1940 年代末，街区に少数の居住者が現れたとはいえ大多数がフリンジに生活をつづけていたガミラロイは，領域の西方ダーリング川流域に暮らす諸集団に対して，恐れを抱いていた。これらの集団においては，最後の呪術師（アボリジナル・ドクター）がまだ機能していたからである。その一方で彼らは，これらの人びとを「野蛮人 Wild Blackfella」，「時代遅れの奴ら Old Timers」とみていたのであった（Reay, M. 1949）。当時のニューサウスウェールズ州では「アボリジナル保護法 1943」Aboriginal Protection（Amendment）Act 1943（同 1940 年の改正法）のもとで，アボリジナルの一般社会への同化が促進されていた（Cunneen, C. and Libesman, T. 1995: 38）。ヨーロッパ人人口が相対的に少なかったダーリング川流域の諸集団に対するガミラロイの認識は，そうした状況を反映していたのである。それはまた彼ら自身の社会内部にも，具体的な形をとって現れていた。

リーおよびシトリントンが報告するところによれば（Reay, M. and Sitlington, G. 1948 および Sitlington, G. 1948），当時のモリーにはヨーロッパ人社会の階層をうつしとった 3 つの「クラス」が存在していた。町に生活するガミラロイ総人口が 500 人余であった当時，Upper Class とよばれて最上層に位置したのは，そのほぼ 2 割を占めた街区とソーピイ・ロウの居住者である。これに対してミドル・キャンプとボトム・キャンプ（アボリジナル・リザーブ）に住んだ 6 割強の人びとは，最下層のクラスだとされた。両者の間に位置づけられていたのがトップ・キャンプ（スタンリー・ビレッジ）とスティール・ブリッジ・キャンプの 100 人たらずの人たちである（リーらの報告にはコモン・キャンプについての説明を欠いているが，彼らは Lower Class を

構成した)。これらの階層の内実でもあり外部的な指標ともされたのは，住居のありようを含めた生活の水準であり，一時的にであれ雇用された相手とそこでの労働の質であり，ヨーロッパ人がもつ価値への志向性であった。最上層に属する少数の人びとは自己所有の住宅か賃貸住宅に生活し，家具を整え，少なくともこの町のヨーロッパ人社会において最上層を形成する農牧場主のもとで働いた経験をもっていた。彼らはそうした階層の生活様式を熟知していたのである。これにつぐトップ・キャンプとスティール・ブリッジ・キャンプの住人からなる中間の「クラス」は，粗末な小屋に居住するものの，一時的ではあったにしろ毛刈り職人や鉄道の保線員であったり（彼らはヨーロッパ人が組織したそれぞれの組合に加入することがあった)，通過客を対象にするホテルの洗濯係を主要な職種とし，社会的な上昇志向を強くもつ人びとであった。これ以外の大多数が属したのが，粗末な小屋やテントに生活し，農牧場での季節を限った雑役しか仕事のなかった最下層の「クラス」である。その人びとと中間層以上の人との間にはほとんど交際がなかった。後者は，「不潔な」最下層の人と自らとを，ヨーロッパ人が同一視するのを嫌ったからである。たとえばボトム・キャンプで連日のようにひらかれるトランプゲームのギャンブル，ハウジー・ハウジー Housie-Housie には，ソーピイ・ロウをはじめとする街区の居住者はもとより，トップとスティール・ブリッジ・キャンプの住民は参加しなかったのである。スポーツチームもまた，それぞれ別べつに構成されていた。

こうしたガミラロイ内部の「クラス」は，彼らがダーリング川流域の諸集団に対したのと同様に，当時の「オーストラリア」社会への同化の度合いにもとづくものであった。それゆえにこれは，ヨーロッパ人社会のなかに生きようとする中間層以上の人びとにとって，大きな意味をもったのである。しかし，彼らによって最下層におかれた人びとにとっては，同じ黒人 Blacks として，「クラス」間の差異も「クラス」の存在そのものも否定すべき対象であった。その意味において下層におかれた人びとの主張は，アボリジナル社会に「クラス」の存在を認めなかったヨーロッパ人と共通する。ヨーロッパ人はすべてのアボリジナル（ガミラロイ）に対して温泉プールの使用を禁じたのであり，映画館では最前列にその席を指定した。さらにその子弟を公立学校から排除してミーハイ・ミッションに設けられた「アボリジナル学校」への通学を強い，死者の埋葬は教会各派から孤立した共同墓地の一角に限ったのである[10]。ヨーロッパ人が自らのために設けた諸施設の利用に関しては，ガミラロイとの間にはっきりとした差別 Colour Bar が存在していたのであり，それは婚姻によっても解消されなかった。

アボリジナルがこうして自らを「クラス」によって差異化することは，モリーのガミラロイだけに限られなかった。彼らが「野蛮人」と称したウォルゲットから西約 200 km の地方町ブレウォリナ Brewarrina に住んだ 52 家族の間でも，まったく同じ現象が，モリーから 10 年遅れた 1950 年代になって起こっていたのである（Fink, R. A. 1955）。それは現在にいたるまで維持されてきた。

1960 年代になるとミドル・キャンプはミーハイ・ミッションに吸収され，トップとスティール・ブリッジの 2 つの居住者もスタンリー・ビレッジに移り，最後まで残ったコモン・キャンプは 1971 年の大洪水によって消滅した。モリーのガミラロイ居住地は，イースト・モリーの街区（主としてソーピイ・ロウとジェームス通り），およびミーハイ・ミッションとスタンリー・ビレッジという現在の状態に移行する。したがって，今日おこなわれている「クラス」区分は，ソーピイ・ロウを除いて，居住地との直接的な結びつきはない。自己所有住宅に居住し定職をもつソーピイ・ロウの居住者はアップ・タウン・ブラックス Up Town Blacks とよばれ，その生活水準はエアコンディショナーと自家用車に象徴される。これに対して大多数の人びとは，暮らしぶりに微妙なちがいを内包しつつも，社会的にはかつての中間層にあたる「クラス」を構成する。1940 年代の「クラス」が「オーストラリア」社会への同化を基本的な指標としたのに対し，現在ではそれが経済的・物質的豊かさに変わったのである。それゆえにまた中間層を構成する個々人の認識には細かなちがいが意味をもつようになり，自らを下層に位置づける人のなかには，依然として「クラス」の存在を否定する者もみられるのである。居住地が「クラス」を反映しなくなった現在，モリーのガミラロイ・コミュニティはより個別化が進んだといえるのかもしれない。

もとよりガミラロイの内部に彼らが設けたこの「クラス」は，下層から上層への上昇を拒むものではなかった。その最大の契機となったのが婚姻である。テリー・ハイ・ハイからトップ・キャンプに家族とともに移住したある女性は，結婚を契機に街区の居住者となったのであり，1962 年にミーハイ・ミッションに生まれた男性もまた結婚後はイースト・モリーに生活する。

地方町モリーのガミラロイが形成したこうした「クラス」は，アボリジナル人口の大きさが匿名性をもたらす州都（メトロポリタン）には存在しなかった。たとえば南オーストラリア州の州都アデレードの場合，彼らの生活の中心のひとつとなった他者認知は，第一義的に家族（拡大家族）であり，その外側に広範な親族と出身地を同じくする人びとが位置していた。それは都市移住以前の生活スタイルを背景としたアボリジナルのネットワークとして機能したのであり，州都に生活するアボリジナルのひ

とつの特徴とみられてきた（Schwab, R. G. 1991）。それはモリーのフリンジ・キャンプにおける出身地や出身集団のちがいによる居住者の差異化に共通する。しかし地方町モリーでは，そのうえさらにすでに述べたようなアボリジナル相互の間における生活の差異が，「クラス」としてそれぞれの時代背景に応じて強調されてきたのである。それは地方町のアボリジナルがもつひとつの特徴でもあった。

4.3　ジョンとビルの暮らし

モリーのガミラロイは，移住後すべての人がこの町に住みつづけたわけではない。州政府がおこなった「アボリジナル家族の再定住計画」Aboriginal Family Resettlement Scheme によって 1980 年代はじめにタムワースへ移った少数の家族を別にしても（Morgan, G. 1999），彼らは牧童として，あるいはさらなる牧地や農地開墾の労働者として各地を移動していた。ジョン John とビル Bill はそうした例である。

1945 年ミドル・キャンプに生まれたジョンは，ドロゥーバー Drover（牧場と市場との間で群れのまま家畜移送にたずさわる仕事）だった義理の父につれられて各地を旅し，11 歳でクィーンズランド州のある牧場に雇われた。牧場の見回りが仕事で，馬で牧地を一回りするのに 2 日かかったという。15 年この仕事をつづけてモリーにもどったジョンは，ガミラロイ女性と結婚し，クィーンズランド側の州境の町ガンディウィンディ Goondiwindi で鉄道の保線員として働いている。その後一時ブリスベンで堵殺にたずさわったあと 1991 年に再びモリーにかえり，今の借家に暮らしている。収入は 1973 年頃から栽培が本格化した綿花農場での季節労働で，耕区の除草 Cotton Chipping と，機械処理するために収穫直後の綿花を 45 kg の方形にまとめあげるモジュール Module づくりしかない。幼いときから各地を移動しつづけた彼は文字が読めないものの，「職業訓練校」Technical And Further Education で絵画を学び（学費は全額州政府負担），「1992 年度アボリジナル優等生」を獲得している。彼はいまやガミラロイ美術伝統の継承者のひとりとなった。

ビルもまた人生の大半を各地の移動に費やしてきた。1927 年ボトム・キャンプに生まれると，30 年代なかばにはカトリックが布教拠点をおいたミーハイ・ミッションの「アボリジナル学校」にしばらく通う。公立の学校からガミラロイの子弟を排除した結果として 1934 年に開校したこの学校には，1946 年まで有資格教師は不在のままで（Sitlington, G. 1948），今なおモリーに住むガミラロイはそれを「幼児学校」Infant School とよびならわしている。13 歳でドロゥーバーになり，クィーンズランド各地（チャーターズ・タワーズ Charters Towers など）で牧地の開墾に従事する。20 歳頃か

らは牧地を小麦栽培用の農地に造成する作業にたずさわり（北西平原における小麦栽培は 1901 年頃から本格化する），1950 年にモリーにもどっている。それから 10 年ほどを，病院の建て替えにともなう木材運搬やブロック積みなどさまざまな雑役で日をつないだビルは，1961 年にモリー北西とナラブライ Narrabri 西部ではじまった大規模綿花農場のための再開墾に従事してきた。この地での綿花栽培には，大規模灌漑が不可欠だったからである。その後綿花畑の除草とモジュール作りの季節労働にしたがってきた彼は，今は生活保障金を唯一の収入として，街区の一角にひとりで生活する。

この 2 人は自らを中間下層に位置づける。「クラス」が今なお存在することに彼らは否定的である。

5　まとめ

「白人オーストラリア」Settled Australia を生きるガミラロイの人びとは，かつて入植者が開設した大規模牧場に日常的にも宗教上もやむなく結びつくことで，彼らの領域である北西平原に生活の場を刻んできた。その後，牧場が大規模な小麦農場となり，1960 年代からの綿花農場へと変容する過程で，ガミラロイの人びとはそれらの開設にともなう再開墾をつうじて農場との結びつきを維持してきた。しかし，ひとたび耕地が造成されると，綿花畑の除草を除いて，ガミラロイは労働の場を失ったのである。現在，モリー周辺の大規模農場主が彼らを雇用する例はない。たとえば，この町の名士で大農場主である SNCL は，家事全般にたずさわる女性をはじめ 4 家族を家族ぐるみで雇用するが，そのすべてがヨーロッパ人である。こうしてガミラロイはこの町の基幹産業とのかかわりをなくし，「穏やかで静かな町」に生活することになった。だがそこには，彼らの存在を刻み込む場，ニッチェはほとんど残されていない。「シドニーであれば街路で楽器を演奏するなどして生活することもできるが，ここではそうもいかない」と，ミーハイ・ミッションに住むある青年は語る。モリーは匿名社会からはほど遠い人口規模しかないからである。そうした町に住む彼らにとって，自由の意味は「クラス」によって異なっている。ソーピイ・ロウをはじめ上層「クラス」に属する人びとにとっての自由とは社会保障からの自立であり，中間下層にとっては貧困からの脱却である。その状況は，フリンジ・キャンプに暮らし，農牧場との結びつきのなかにかろうじて存在の場をみいだしていた時代と変わりないのである。

注

1）ミッションは，ふつうキリスト教会各派が運営し，アボリジナルを集住させた伝道所集落をいう。これらは政府による同化政策の実施機関として機能した。ただし，ニューサウスウェールズ州のアボリジナルがいう「ミッション」は，これと大きく異なっている。注 3 参照。
2）ニューサウスウェールズ州北部からクィーンズランド州中部にかけてのアボリジナルは，被植民地化の過程のなかで移住を強要され，他集団との混住を強いられてきた。その結果として，彼らは近縁な言語集団相互の間であらたなまとまりを形成する。これがマリーである。ただし，それがいつのことであり，いつからマリーが大規模かつ遠隔地への移住経験がないガミラロイをも包摂するようになったのかについては，まだ何もわかっていない。
3）ニューサウスウェールズ植民地およびその後につづく州では，借地・用益権 Lease や所有権 Freehold が設定されていない公有地 Crown Land に設けたアボリジナルの集住地をリザーブ Reserve という。このリザーブに「アボリジニ保護委員会」Aborigines Protection Board または「アボリジニ福祉委員会」Aborigines Welfare Board が監督官を常駐させ，彼らの生活全般をコントロールした施設をステーション Station とよんだ。またこの州（植民地）では 1893 年以来，これらのリザーブやステーションでのキリスト教会各派によるアボリジナルのコントロールを排除してきたが（布教拠点の形成は両委員会いずれかの要請による），アボリジナルはこれら，とくにアボリジナル・ステーションをミッションとよびならわしてきた（Goodall, H. 1996: XV）。
4）ミーハイ・ミッションとスタンリー・ビレッジの住宅使用料は，家具調度を含めて週当り 75 〜 100 ドルである。しかし，現在ではそのすべてを，この町の「アボリジナル土地委員会」が支払う。
5）この報告ではオーストラリア人を，ガミラロイをはじめとする先住民と，植民者とその子孫とに区別して，後者をとくにヨーロッパ人と表記する。
6）マイオール・クリークの虐殺にかかわった 12 人のうち 7 人は，裁判の後に処刑された。
7）モリーにおける教会各派の開設はメソディストが 1867 年，プレシビタリアンが 1884 年，イギリス国教会が 1894 年である。
8）ガミラロイの領域における天然痘は，1828 年から 1832 年にかけて流行した。ただし，キャンベルによると，この病気はヨーロッパ人の植民以前にアジアから大陸北部にもたらされており，それが各地のアボリジナル集団を介してこの地に伝播したものだという（Campbell, J. 2002: 78–79, 137）。
9）人類学者エルキンは，この時期「アボリジニ保護委員会」のメンバーであり，その後 1950 年代には「アボリジニ福祉委員会」のメンバーでもあった。いずれも彼らの同化を主目的とした機関である。
10）共同墓地での埋葬地の区別は現在も変わりない。

文　献

Australian Bureau of Statistics
1997 *1996 Census of Population and Housing: Expanded Community Profile. Cat. no. 2020.0.*
Barwick, D.
1963 A Little More than Kin: Racial Affiliation and Group Identity among Aborigines Migrants in Melbourne. Ph. D. Thesis. Australian National University.
Beckett, J.
1988 The Past in the Present; The Present in the Past: Constructing A National Aboriginality. In Beckett, J. (ed.) *Past and Present*, pp. 191–217. Canberra: Aboriginal Studies Press.
Bell, J. H.
1959 The La Perouse Aboriginies: A Study of thier Group Life and Assimilation into Modern Australian Society. Ph. D. Thesis. University of Sydney.

Briggs-Smith, N.
1999 *Moree Mob.* vol. 1.: *Winanga Li* (*Gamilaroi/ Kamilaroi* “*To Remember*”). Moree: Northern Regional Libraly and Information Service.
Campbell. J.
2002 *Invisible Invaders: Smallpox and Other Diseases in Aboriginal Australia* 1780–1880. Calton: Melbourne University Press.
チャールズ・パーキンス（中野不二男訳）
1987 『黒い私生児　チャールズ・パーキンス』くもん出版
Coombs, H. C., Bradel, M. M. and Snowdon, W. E.
1984 (1983) *A Certain Heritage : Programs for and by Aboriginal Families in Australia.* Centre for Resource and Environmental Studies. Canberra: Australian National University.
Cuneen, C. and Libesman, T.
1995 *Indigenous People and the Law in Australia.* Sydney: Butterworths.
Elkin, A. P.
1947 Notes on the Aboriginal of the Walgett District. *Mankind* 3(7): 207–209.
Fink, R. A.
1955 Social Stratification: A Sequel to the Assimilation Process in A Part-Aboriginal Community. M. A. Thesis. University of Sydney.
Finlayson, J.
1995 *Aboriginal Employment, Native Title and Regionalism.* (Discussion Paper No. 87) Canberra: Centre for Aboriginal Economic Policy Research.
Fison, L.
1991 (1880) Kamilaroi Marriage: Descent and Relationship: An Attempt to Trace the Origin and Development of the Turanian System of Kinship, as Show in the Class Division of the Australian Aborigines, with Their Laws of Marriage and Descent. In Fison, L. and Howitt, A. W. *Kamilaroi and Kurunai*, (George Robertson. Melbourne) pp. 21–176. Canberra: Aboriginal Studies Press for the Australian Institute of Aboriginal and Torres Strait Islander Studies.
Goodall, H.
1996 *Invasion to Embassy: Land in Aboriginal Politics in New South Wales*, 1770–1972. St. Leonards: Allen and Unwin.
Hall, M. D. (ed.)
2000 *Heartdreams and Legends: Story of Two Peoples.* Fulton: Denkota Publishing.
Hollinsworth, D.
1992 Discourses on Aboriginality in Urban Australia. *Oceania* 63(2): 137–155.
Horton, D.
1994 Kamilaroi. In Horton, D. (ed.) *The Encyclopaedia of Aboriginal and Torres Strait Islander History, Society and Culture.* Vol. 1, pp. 530–531. Canberra: Aboriginal Studies Press for the Australian Institute of Aboriginal and Torres Strait Islander Studies.
Keefe, K.
1988 Aboriginality: Resistance and Persistence. *Australian Aboriginal Studies* 1988(1): 67–81.
Mathews, R. H.
1894 Aboriginal Bora held at Gundabloui in 1894. *Journal and Proceedings of the Royal Society of New South Wales* 19: 98–129.
1896 The Bora of Kamiraloi Tribes. *The Royal Society of Victoria* 25: 37–173.
1897 Kamiraloi Totem System. *The Royal Society of New South Wales* 31: 156–171.
Millis, R.
1994 *Waterloo Creek: The Australian Day Massacre of 1838, Geroge Gipps and the British Conquest of New South Wales.* Sydney: University of New South Wales Press.
Moree Plains Shire Coucil
1989 *Moree District Hospital: Centenary Annual Report 1889–1989.* Moree: Moree Plains Shire Council.
Morgan, G.
1999 The Moral Surveillance of Aboriginal Applicants for Public Housing in New South Wales.

Australian Aboriginal Studies 1999 (2): 3–14.
Morphy, H
1999 (1998) *Aboriginal Art.* London: Phaidon Press.
Mountford, C. P. (ed.)
1956, 1958, 1960, 1964 *Records of the American-Australian Scientific Expedition to Arnhem Land* Vol. 1–4. Calton, Parkville: Melbourne University Press.
Myall Creek Memorial Committee
2001 *The Myall Creek Massacre: Its History, Its Memorial and the Opening Ceremony.* Bingara: Myall Creek Memorial Committee.
O'Rouke, M. J.
1997 *The Kamilaroi Lands: North-Central New South Wales in the Eary 19th Century.* Canberra: The Author Griffith ACT.
Reay, M.
1949 Native Thought in Rural New South Wales. *Oceania* 20(2): 89–118.
Reay, M. and Sitlington, G.
1948 Class and Status in a Mixed-Blood Community (Moree, N. S. W). *Oceania* 18(3): 179–207.
Schwab, R. G.
1991 "Blackfella Way": Ideology and Practice in an Urban Aboriginal Community. Ph. D. Thesis. Australian National University.
Sitlington, G.
1948 Mixed Blood Aborigines at Moree, N.S.W. *The Aborigines Protector* 2(4): 7–13.
Tindale, N. B.
1974 *Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution, Limits, and Proper Names.* Berkeley and Los Angels: University of California Press.
1974 *Tribal Boundaries in Aboriginal Australia* (Maps). Berkeley and Los Angels: University of California Press.
Webb, R. J.
1972 *" The Rising Sun": A History of Moree and District* 1862–1962. Moree: The Coucil of the Municipality of Moree.

新聞記事

Gwydir Examiner. 1898. 2. 28., 1898. 12. 10.
Moree Gwydir Examiner. 1923. 5. 17.
Northwest Champion. 1924. 3. 13.